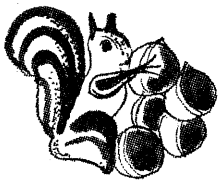
九月の風に

間藤　侑



「風立ちぬ　いざ生きめやも」、夏の終りの高原で、画架が不意に倒れた時、ふと「私」が口にするこのヴァレリーの詩の一節が、堀辰雄の小説『風立ちぬ』の象徴的テーマとなる。確かに、穂の出初めたススキの原を突如として分ける野分けの光景は、夏から秋への自然の単なる転回をさえも、ドラマチックに見せて暗示的である。風は、自然現象の中でも最も日常的で親しいものなのだが、姿も見せずに不意にキャンバスを倒すような風の気配には、時として、不思議な生き物（それも魔的な）の匂いが漂うことがある。講談の妖怪は一陣の生臭い風と共に現われ、映画「太陽がいっぱい」では、殺人をおかしたアラン・ドロンの心を象徴するかのように、突如として激しく風が起こり海は波立つ。「風の又三郎」や「どんぐりと山猫」を見ると、宮沢賢治もまた風使いの名手と言えるかもしれない。

新潟は浜風が強い。「カゼーッ、フクノヤメナサイッ」三才の息子は、真正面から吹きつける強い風に向かって口をとがらして、真剣な今にも泣き出しそうな表情で叫ぶ。デンマークの優れた絵本作家オルセンの作品「かぜ」でも、風はまさに生きている。幼児が風を不思議な生き物のように思うのも、幼児期特有のアニミズム的心性や思考の未熟さによるというよりは、もっと普遍的で自然な感じ方なのかもしれない。私たちおとなは、いつのまにか、論理という現実適応的ではあるがそれだけにまた限定的でもあるものに支配され、そうしたプリミティブな感性を忘れ去りがちであるが、幼児の生きているの

は、自由で素朴な、きらめくような感性の支配する小宇宙であり、まちがいなくそこで「星の王子さま」と出会うことのできる世界だと言えるだろう。感性は、知性の姉である。レオ・レオニも言う。「考えるということの前に、感ずる心を育てなければならない」と。それが最もふさわしいのは、子供時代である。

子供は独自の小宇宙をもち、その中で自由である。個性豊かに生きることを保証される権利がある。しかし、子供と呼ばれる長い時代の中で、真に子供であることを許されるのは、僅かに二、三才以降の幼児期だけではないかという気がする。なぜならば、一、二才児まではまだ赤ちゃんにより多く所属し、小学生は、もういやでもおとなの見方考え方の世界にひきずりこまれていく。だから、二、三才から六才までの幼児期とは、まさに人生の中で「真に子供」でありうる唯一の貴重な時代ではないのだろうか。しかもそれは、今という移ろう時と共に、風のように駆けぬけていく。そのことを私たちは、もっと真剣に考えてみなければならないだろう。

だから、幼児教育は、「真に子供なるものの教育」でなければならず、小学校以上の「おとなの社会に適応し、おとなになっていくための教育」とは、自ら異らねばならない。それは、人間の可能性を探る営みだと言うこともできるだろう。だから、もし学校教育が、究極的には人間の教育を標榜するものならば、幼児教育にその原点を見出し、そこに学ぶ姿勢を求めることが必要であると強く思う。しかし、仮りにすべての学校教育が幼児教育に熱い視線を送ったとした時、頬を赤らめながらもしっかりとそれを受けとめ、自らの確かな想いも返してやることが、今できるだろうか。残念ながら否と言わざるをえないだろう。今年の五月、保育園児の虫歯予防率は約九十%で、幼稚園のそれを大きく上まわることが新聞で報じられた。その事実が、幼稚園や保育園の現場に少なからざる論議を呼んだと言う。しかし、もしそれが教育の成果というような意味で強く語られたりしているのであれば、幼児教育に学べなどという大見栄は慌てて引っ込め、先ず幼児と共に、九月の風に髪をなびかせて駆ける快よさに身を任せることから始めるべきだろう。

（新潟大学）